

## 原著論文

## 災害時生活体験学習における学生の災害に対する意識の変化

——生活体験キャンプと高齢者施設見学を通して——

兎澤 恵子<sup>1)</sup>・高木タカ子<sup>2)</sup>・古市 清美<sup>1)</sup>Changes in students' thinking about disaster  
in experienced-based disaster training—— Experience-based disaster training camp and visit  
to nursing home as educational tools ——Keiko TOZAWA<sup>1)</sup>, Takako TAKAGI<sup>2)</sup>, Kiyomi FURUICHI<sup>1)</sup>

## 要 旨

本学の保健科学部の災害時生活体験科目において「生活体験キャンプ」を実施した。この体験学習が、学生の災害に対する意識の変化にどのように影響しているかを明らかにする目的で、教育評価を実施した。そこで、目標到達度評価アンケート調査結果および「生活体験キャンプ」における体験記録の分析を試みた結果、以下のことが明らかになった。

学生の災害に対する意識は、「生活体験キャンプ」を通して変化したと88%の回答があった。この結果に影響を与えた体験は、事前学習や準備状況、入浴せずに清潔にしたこと、グループ内の連携、資源の工夫、水の制限、演習による学習であった。

災害に対する意識の変化は、準備状況と心の内面に深く印象付けられた不測の体験によって認識され、心構えとして育っていくことが明らかになった。また、このことから、「生活体験キャンプ」は、必要最低限度の環境条件と日常生活に必要な判断力や応用力を学ぶのに有効な学習素材があることが明らかになり、災害看護基礎教育における教育方法として多くの示唆を得た。

キーワード：生活体験キャンプ・意識の変化・準備性・高齢者・災害看護教育

## I. はじめに

本学は、平成10年4月に単科の短期大学看護学科として設立されて以来、平成13年に地域看護学専攻科、平成14年に理学療法学科が設置された。そして平成17年4月に4年制大学の保健科学部として再スタートした。本学の教育目標は、「豊かな人間性と高度な専門知識・技術を有し、広く社会に貢献できる看護職の養成を目指す」とあり、専門的知識を活用し、地域社会、国際社会に主体的かつ創造的に貢献できる力の育成を目指している。

一方、世界規模で自然災害が発生している。1995年に発生した阪神・淡路大震災以降、災害時の医療・看護に対する意識や関心が高まり、災害看護教育・災害看護教育の必要性が認識されるようになった。しかし、看護基礎教育の中で災害看護を教育課程に取り入れている教育機関はまだ少ない<sup>1)</sup>。日本災害看護学会誌における2003年迄の5年間の文献レビューにおいて、被災者の健康生活状態、救急医療、医療ケア提供者のケア、看護の役割、災害教育と訓練、意識などの研究内容が多く、看護基礎教育については、規準作りが必要である<sup>2)</sup>ことが示されている。また、災害に強い都市作

1) 群馬パース学園短期大学 2) 群馬パース大学

りや緊急時の対応方法などのハード面での備えや整備が行われている<sup>3)</sup>。今日の課題は、防災や災害についての不安が高いにもかかわらず、防災対策が不十分であることや準備行動が行われていないことなどから、災害に対する意識の向上と準備性に関する模索の必要性が高いことが伺えた。災害に対する備えの難しさは、①訓練された専門家が少なく具体的に何をすることが不明確であること、②災害は防ぎようがなくそれによって生じる問題は解決できないと考えられがちであること、③いつ発生するかわからない災害に対して備えを持続すること自体が難しいことなどが挙げられる<sup>4)</sup>。つまり、認知的な教育だけでなく、準備性と行動化に向けての教育や訓練方法の工夫と開発が望まれていることを示している。

本学では、今年度（平成17年）よりカリキュラムの中に「災害時生活体験」を選択科目として科目立てしており、カリキュラムのねらいは、広く災害および災害時における看護の役割について理解することにある。そして、1年次の夏季休暇期間中に「生活体験キャンプ」を実施した。

災害時看護の役割とは、看護の知識や技術を駆使しながら、生命や健康生活への被害を少なくするための看護活動であり、そして、①被災状況の把握、②健康レベルの維持・回復、③安全の確保・保持、④被災者の生活の立て直し、⑤救護・救援システムの構築と運用<sup>5)</sup>、の5項目が研究によって明らかされている。

本カリキュラムにおける生活体験キャンプでは、②健康の維持・保持、③被災者の生活の建て直しについて学ぶことが可能であると考えられる。

## II. 目的

我々の目的は、「生活体験キャンプ」における日常生活を通して、学生に、災害が発生しライフラインが途絶した状況下で自活していく為の基本的な集団生活を体験学習させることであり、この体験学習がどのように災害に対する意識の変化や心構えに影響し、災害時看護への準備性や行動化につながるかどうか明らかにするために教育評価をすることである。

高木は、キャンプ生活は日常生活行為の原点であり、それを通して看護の原点を学ぶことができる<sup>6)</sup>と主張し、被災者への支援活動に入る事前にまず自分自身の準備が必要であると考えている。そこで、準備性とは、災害時看護の役割に関する知識を深め、支援者となる

自分自身の身を災害現場でも守ることのできる、必要最低限度の基本的な知識・技術・態度を身につけることとした。また、高齢者は特に、災害時には過酷な状態に置かれがちであり、高齢化率の上昇や慢性疾患による長期臥床者の増加から、高齢者への理解と援助が必須になる。学習内容に高齢者疑似体験および高齢者施設見学、救急法、車椅子操作を計画し実施した。

このように、学生の防災意識の準備性に目を向け、行動化を目指して意識付けの強化を試みた学習プログラムの報告は類をみない。生活感の浅い支援者となる学生の、災害に関する看護基礎教育の方向性について、更なる示唆を得たいと考える。

## III. 方法

### 1. 対象

対象は、本学部の災害時生活体験科目を選択している50名（男性19名・女性31名、平均年齢18.7歳）のうち、平成17年8月30日から9月1日までに実施した「生活体験キャンプ」に欠席した学生2名を除き、依頼に対して同意が得られた48名（男；女＝2：3）、さらに実施後6週目のアンケート調査に参加できた1年次の学生42名（男；女＝2：3）を対象とした。また、生活体験キャンプの日々の振り返りとして記載した体験記録、および生活体験キャンプ終了後の目標到達度評価アンケート調査結果を分析対象とした。

### 2. 調査期間

「生活体験キャンプ」が開始された2005年8月30日から最終日の9月1日迄の3日間と、2005年10月12日のアンケート調査日迄とする。

### 3. 調査方法

体験記録、所定の用紙に自由記載法で記録し、体験キャンプ終了後の夏季休暇終了日翌日に提出されたものを用いた。また、目標到達度評価アンケート調査は集合調査法を用いた。質問項目は、独自の内容を作成し、順序尺度による選択回答形式および一部自由回答形式を用いた。そして、目標到達度評価のアンケート調査は、夏季休暇が終了して再び学生生活リズムが安定すると推測した時期（6週間後）に再度説明と同意を得て実施した。

### 4. 内容および分析方法

生活体験キャンプの体験記録は、グループ毎に話し合い記録係りが記録したものを分析した。分析方法は、生活体験キャンプの目標に添って忠実に一文章一意味

として読みとれる内容に吟味し、カテゴリーおよびサブカテゴリーに整理した。抽出したキーワードをもとに日々の学習内容や変化を明らかにした。

また、目標到達度評価アンケートは、13項目について5段階法評価尺度により得た回答結果を分析した。2項目を主要質問として抽出しMann-WhitneyのU検定を各項目間で、また2項目を「有」と「無」に分類した値と平均値の比較にはパラメトリック法によるt-検定を、同様に2項目と他項目の比率の関連性にはPearsonのカイ2乗検定を行った。尚検定には、統計解析パッケージSPSS11.0を使用し、統計学的解析を行った。

#### 1) 対象者の概要

学生の年齢、性別、高齢者との同居の有無、ボランティアの経験の有無、および事前学習の内容を項目として挙げた。

#### 2) 生活体験キャンプの体験記録の分析方法

日々の体験記録から、生活体験キャンプの目標の到達度合いに関する内容を明らかにした。大学に入学後5ヶ月目、約4ヶ月間の学習を経て臨んだ生活体験キャンプで何を実感したのか、初日からの学習内容と内容の意味づけを行い、経時的に捉え分析する。

#### 3) 目標到達度評価アンケートの内容と分析方法

アンケート内容は、「①準備は十分できた」「②事前学習は充分できた」「③入浴出来なかったが清潔は保たれた」「④睡眠・休息は充分取れた」「⑤食事は充分であった」「⑥水は充分であった」「⑦役割は果たせた」「⑧グループでの連携は取れた」「⑨限られた資源の工夫はできた」「⑩救急法は学習できた」「⑪高齢者の理解は深まった」「⑫心構えはできた」「⑬災害への意識は変化した」について回答を得た。項目ごとの平均値および標準偏差から目的達成度状況を明らかにした。

統計処理をするために、「多いに変化有り」と「まあまあ有り」(1と2)を「有」、「ふつう」と「あまりない」と「全く変化無い」(3～5)を「無」として集計表を作成した。また、この生活体験キャンプをとおして、「⑫心構えはできた」「⑬災害に対する意識は変化した」の2項目を主軸として有意に影響しているのは何か、について結果を出した。多角的に検討し、相互の関係性を明らかにした。

#### 4) 「生活体験キャンプ」中の演習の分析方法

生活体験キャンプの日中は、救急法および車椅子体験、更に高齢者疑似体験と高齢者施設見学を実施した。学生は簡単なレクチャーを受けた後、各8名のグルー

プに分かれて疑似体験および施設見学を行った。疑似体験と見学は、グループによって前後した。その体験から学生が学んだことを明らかにし、災害との関連性において結果を分析した。

### 5. 生活体験キャンプ実施内容

#### 1) 目的

災害が発生しライフラインが途絶した状況下で自活して行く為の、基本的な知識、技術や判断力、応用力を、集団生活を通して体験する。

#### 2) 目標

- (1) 生活の中で災害に対する準備ができる。
- (2) ライフラインが絶たれた時の対処方法がわかる。
- (3) 集団行動を理解しその一員として行動できる。

#### 3) 単位取得との関係

「災害時生活体験」科目は、選択科目で1学年前期において1単位を取得出来る。主な学習内容は、科目オリエンテーション、デイ・キャンプ、講義による災害に対する種類や国家・個人団体における災害対策・対処方法、命の大切さ、職業上の役割など幅広い内容を網羅している。

#### 4) 事前準備

2005年4月22日に講義全体および、同年7月15日に生活体験キャンプのオリエンテーションを実施。天候に左右されない実施となっている。その後、自己学習を含むグループごとの目標設定や役割の決定などに関する詳細な準備を実施した。

#### 5) 「生活体験キャンプ」の実施内容

実施場所は、大学の敷地内において実施した。

主な実施内容は、①テントの設営、②人数と健康状態の確認、③1日3回の食事と水の配給の準備と実施(昼弁当作り)、④簡易トイレの利用、⑤洗面と簡易の身体清潔、⑥寝袋の準備と睡眠・休息、⑦救急法の演習、⑧高齢者疑似体験と高齢者施設見学(一部施設実施の防災訓練へ参加)、⑨ビデオ学習、⑩一日の振り返りディスカッション、⑪大キャンプファイヤーの準備と実施、⑫スタンプの準備、⑬テントの撤収と後かたづけ、⑭開校式と閉校式、などである。

この理論的背景は、人間が、その人独自の日常生活行動を自力でできる為には14項目の基本的ニーズを満たすように援助すること<sup>7)</sup>、と主張するヴァージニア・ヘンダーソンの看護に関する考え方を根底に据えている。また、体験キャンプの集団活動全てにおける日常性を学習素材とした。

看護学科教員3名および学外補助指導員の参加協力

を得て実施した。

## 6. 倫理的配慮

生活体験キャンプの体験記録の活用および目標到達度評価アンケートの実施については、事前に研究目的と方法、公表について対象者に説明を行った。また、未記入であったとしても個人評価の対象にならないことや自由意思であること等を口頭で説明し理解を得た。データは研究論文の完成時に破棄することを伝えた。

## IV. 結 果

### 1. 対象者の概要

#### 1) 対象者の背景

表1で示すように、対象者は、18歳が31名(65%)、19歳が15名(31%)、20歳以上2名(4%)であり、その平均年齢は18.7歳、男女比は2:3であった。

また、高齢者と同居している学生は、女性29%、男性17%であり、46%の学生が同居していた。更に、ボ

表1 参加学生の主な背景についての一覧

	年 齢			性 別	同 居	ボランティア
	18歳	19歳	20歳以上			
女 性	19	8	2	29 (60%)	14 (29%)	25 (52%)
男 性	12	7	0	19 (40%)	8 (17%)	14 (29%)
合 計	31 (65%)	15 (31%)	2 (4%)	48 (100%)	22 (46%)	39 (81%)

人数 (%)

ランティアの経験の有無は、女性52%、男性29%で、81%の学生が高齢者と接していることが分かった。

#### 2) 事前学習内容

事前学習は、①熱中症に関すること(熱中症の症状・対処方法・罹りやすい条件)、②大脳前頭連合野の働き(思考と情報処理について)③老人ホームなど老人施設について(施設の種類、適正年齢や目的など)、④水の濾過方法、(コーヒーフィルターを用いた方法と牛乳パックを使った方法)、⑤テントの設営方法(種類と目的について)、⑥必要物品など準備内容が主であった。グループ学習と個人学習方法を取り入れておりグループによって内容に多少の違いが見られた。

### 2. 「生活体験キャンプ」体験記録の結果

開校式に始まり、テントの設営など日常生活に対する体験の詳細について、新鮮な感想を交えて記録されている。カテゴリー(学習目標)とサブカテゴリー(目標に添った記録の内容)に分類し、表2に示した。

1) 目標1、生活する中で災害に対する準備ができる、については、(1)外部環境を把握する必要性につ

表2 学習目標に添って分類した体験記録

カテゴリー	サブカテゴリー	具体的な内容
1. 日常生活の中で災害に対する準備ができる。	1) 外部環境を把握する必要性が理解できた。	①天気予報が知りたかった ②夜が寒い ③雨で着替えなどが濡れてしまってショックだった。 ④浸水を防ぐことと健康管理の維持は関係がある。 ⑤雨について工夫できなかった。 ⑥防寒と健康管理の維持は関係がある。 ⑦太陽は出てもあまり水はあたたまらなかった。 ⑧昼夜の温度差が激しい。
	2) 住居環境を整える必要性が理解できた。	①テントの位置や場所を良く考えて選ぶ必要があった。 ②テントの中に敷くマットをもつて来れなかった。 ③雨のことも考慮してテントを張る必要があった。 ④実際に災害にあったとき使える知識が増えた。 ⑤テントの建てかたをもっと工夫すればよかった。
	3) テント内とゴミ管理の必要性が理解できた。	①ゴミ袋への防虫対策をちゃんとすれば良かった。 ②ゴミ袋始末に注意しなかった為アリのたかってしまった。 ③防虫対策をもっとちゃんとすれば良かった。 ④テントの中が狭く大変だった。
	4) 事前イメージの必要性が理解できた。	①準備が足りなかった。 ②もう少し事前学習をして望むべきであった。

	<ul style="list-style-type: none"> <li>③洗濯バサミは何にでも使える。</li> <li>④サランラップをもっと持ってくればよかった。</li> <li>⑤次に何かあったときに必要な持ち物などがわかった。</li> </ul>
5) 状況に対応する自覚の必要性が理解できた。	<ul style="list-style-type: none"> <li>①初日はだらだらしたが徐々に駆け足ができた。</li> <li>②初日はなかなか連絡しあうことができなかった。</li> <li>③2日目からは連絡を取り合うことが出来た。</li> <li>④物がなくても代用する事をパツと思いつけるようになった。</li> <li>⑤身体を壊したけれど帰らずに最後まで残れた。</li> <li>⑥自分の行動に責任をもち一人一人役割を持てた。</li> <li>⑦一つのことを作り上げていくことを各自実践できた。</li> <li>⑧晴れの日も雨の日も災害時体験できてよかった。</li> </ul>
2. ライフラインが絶たれた時の対処法がわかる。	<p>1) 水資源に対する工夫がわかった。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>①水の大切さを学び無駄遣いしないようにした。</li> <li>②食器を拭いてから洗えた。</li> <li>③水は使わない為にトイレトペーパーで食器をふいた。</li> <li>④ウェットティッシュを多く使ってゴミを多く出してしまった。</li> <li>⑤工夫して行動しスプーンを何回も使えた。</li> <li>⑥水は使わないためにラップの使用をした。</li> <li>⑦限られた水を有効に使い水の大切さを理解できた。</li> <li>⑧食器にラップを巻いたり水を使わない方法を考えた。</li> </ul> <p>2) 非常食の内容と満足度がわかった。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>①非常食は栄養もとれるし良いものだと思う。</li> <li>②出た物を食べるので自分達で栄養を気にできない。</li> <li>③保存食は自分達はよいが高齢者には味が辛い。</li> <li>④野菜が少ない。</li> <li>⑤油っこいものばかりだった。</li> <li>⑥予想以上においしかったという意見が多かった。</li> <li>⑦限られた食材でバランスよい栄養が取れなかった。</li> <li>⑧食事を食べ残す人が多かった。</li> <li>⑨サイドに付いたカレーに水を入れ最後迄使いきれた。</li> <li>⑩食事はあまりおいしくなかった。</li> </ul>
	<p>3) 入浴せずに清潔にできる方法がわかった。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>①清拭シートはすごく良かった。</li> <li>②汗拭きシートを活用し体を清潔にできた。</li> <li>③ドライシャンプーはあまりよくなかった。</li> <li>④ドライシャンプーの後に頭をタオルでふくとすっきりした。</li> <li>⑤着替えが大変であった。</li> </ul>
	<p>4) 携帯トイレの利便性がわかった。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>①携帯トイレは思ったより丈夫で安定感がある。</li> <li>②携帯トイレは使いやすかった。</li> <li>③携帯トイレは匂いが気になった。</li> <li>④ライフラインが完全に絶たれなかったので頼ってしまった。</li> </ul>
	<p>5) 身体的・精神的負担が理解できた。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>①いつもより睡眠時間はとっているのに眠い。</li> <li>②慣れないことで神経をつかった。</li> <li>③環境がかわったせいで寝付けなかった。</li> <li>④実際にやってみると思っていたより全然きつかった。</li> </ul>
3. 集団行動を理解しその一員として行動できる。	<p>1) 協力し合うことの大切さを学んだ。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>①自ら進んで仕事を見つけ困っている人に協力できた。</li> <li>②しっかり連絡を取り合えた。</li> <li>③雨など大変なことを経験し段々団結した。</li> <li>④気合を入れたせいか無駄な動きはなかった。</li> <li>⑤一人一人しっかり意見が言え良い方向に進んだ。</li> <li>⑥助け合いができた。</li> <li>⑦お互いに声掛け合って行動することができた。</li> <li>⑧人数が少ない分手分けして仕事をとりくめた。</li> <li>⑨役割分担して仕事をする事ができた。</li> <li>⑩浸水にあったテントを干した。</li> <li>⑪施設訪問時食事の準備や後片付けを自ら行った。</li> <li>⑫朝早く起きてそれぞれテキパキと寝袋の片付けをした。</li> </ul> <p>2) 時間を守ることを学んだ。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>①集合の時に時間を守れなかった。</li> <li>②一日目の食事時間の集まりが遅れてしまった。</li> <li>③2日目から時間に気をつけることが出来た。</li> </ul>

	④男子は就寝時間がまもれなかった。 ⑤空き時間を利用して早め早めに片付け有効に使えた。
3) 楽しい時間の共有の意義を学んだ。	①スタントが中々決まらなかったが成功してよかった。 ②もっと集中しておけばよかった。 ③スタントはみんな頑張った。 ④作るより仲良く出来て全然早かった。 ⑤スタントの時他の班の人達が乗ってくれやりやすかった。 ⑥空いている時間に練習しておけばもっと良くできたと思う。
4) 相手の行動から影響を受けて学んだ。	①朝礼の時の声の大きさが不十分だった。 ②声が小さかった。 ③何を手伝ったらいいかわからなく勉強不足を反省した。 ④誰一人怪我することなく無事終えることができた。 ⑤ギブアップしない ⑥ぞうきんがない人も軍手がない人も工夫していた。 ⑦個性豊かな班員だったのでまとまりが足りなかった。
4. 生活体験キャンプの演習から学ぶことができる	1) 救急法の技術の必要性を学んだ。 ①実践が恥ずかしがってあまり出来なかった。 ②救急法の流れを理解し率先して助けられる。 ③今後に生かせる ④とっさに使える練習が大切である ⑤いつ何が起きるかわからない。 ⑥どのように動いて適切な指示をするか学べた。
	2) 高齢者疑似体験・老人施設見学を通して具体的なイメージができた。 ①関節が曲がらないだけでも歩行することが難しかった。 ②目や耳が悪くなることも体験し不自由さを感じた。 ③杖や道具に頼らないと歩くことができなかった。 ④大声でいうだけでは相手は怒っていると勘違いする。 ⑤片麻痺で階段上り下りが大変だということが分かった。 ⑥お年寄りとのコミュニケーションをとるのが難しかった。 ⑦一言目が一番難しかった。 ⑧重りをつけることで筋力低下した不自由さが理解できた。 ⑨避難訓練は一人に一人の看護師がつくことが望ましい。 ⑩人出不足で実際は避難訓練は難しいと思った。 ⑪老年体験、施設見学を通して普通の人との違いを知った。 ⑫誰がどこにいるか把握することが難しい。 ⑬高齢者と話して想像以外のことが起こって大変だった。
	3) 災害対処の多面性を学んだ。 ①ビデオ学習は有意義だった。 ②NPOの活躍がすばらしかった。 ③聖路加病院のスタッフの判断がよかった。 ④救護体制のよさから学んだ。

いて理解できた、(2)住居環境を整える必要性が理解できた、(3)テント内整理とゴミの管理の必要性が理解できた、(4)学習不足に気付き、事前イメージの必要性が理解できた、(5)状況に対応する自覚の必要性が理解できた。

2) 目標2、ライフラインが絶たれた時の対処方法がわかる、については、(1)水資源に対する工夫がわかった、(2)非常食の内容と満足度がわかった、(3)入浴せずに清潔を保つ方法がわかった、(4)携帯トイレの利便性がわかった、(5)テント生活における身体的・精神的負担が理解できた。

3) 目標3、集団行動を理解し一員として行動できる、について、(1)協力しあうことの大切さを学んだ、(2)時間を守る大切さを学んだ、(3)楽しい時間を共有す

ることの意義を学んだ、(4)相手の行動から影響を受けて学ぶことができた。

4) その他の生活体験キャンプ演習については、(1)救急法の技術の必要性を学んだ、(2)高齢者の具体的なイメージができた、(3)夕方校内でのビデオ学習で、それぞれの所で活躍している医療チームの姿から、災害時対処の多面性を学んだ。

### 3. 目標到達度評価アンケート調査結果

#### 1) 準備に関する自由記載内容の結果

(1)「準備は充分できた」についての平均値(標準偏差)は、表3に示すように質問項目の中では最も低い。

同質問項目の内容で求めた忘れ物状況の結果では、忘れ物をしなかった者が25名(52%)、忘れ物をした者が23名(48%)であり、何らかの忘れ物をした学生が

表3 目標到達度評価アンケート調査結果

n = 42

項目 (カテゴリー・サブカテゴリー)	平均値 (標準偏差)	意識変化の有無			心構えの有無			
		相関係数	t 検定	t 検定有意確率	相関係数	t 検定	t 検定有意確率	
①準備満足度レベル	準備	2.38 (1.267)	-0.213	2.46	*0.018	0.297	0.443	0.66
	事前学習	2.26 (1.035)	0.631	3.966	***0.0001	0.651	-0.752	0.456
②適応満足度レベル	入浴	2.16 (1.057)	0.323	3.059	**0.004	0.2	-0.117	0.907
	休息	1.95 (1.080)	0.022	2.036	*0.048	-0.065	-0.498	0.621
	食事	1.71 (0.969)	0.216	1.12	0.269	0.118	-1.515	0.137
	水	1.9 (0.957)	0.166	-0.129	0.898	0.01	-2.583	*0.013
③関係満足度レベル	役割分担	1.85 (1.723)	0.085	0.866	0.392	0.123	-1.839	0.073
	連携	2.07 (0.894)	0.14	0.597	0.554	0.143	-1.985	0.054
	資源工夫	2.28 (1.065)	0.117	1.827	0.75	0.26	-1.157	0.254
④演習満足度レベル	救急法	2.19 (0.833)	0.39	-0.841	0.405	0.227	-3.719	**0.01
	高齢体験	1.61 (0.763)	0.252	-1.388	0.173	0.115	-4.028	***0.001
⑤評価満足度レベル	心構え	2.23 (1.065)	0.521	3.667	***0.001			
	意識変化	1.74 (0.885)				0.521	3.667	***0.001

\* P &lt; 0.05    \*\* P &lt; 0.01    \*\*\* P &lt; 0.001    t 検定

約半数を占めその比率は1.1 : 1と差が少なかった。忘れた物の種類の数と内容については、表4-1、表4-2に示したように、2種類忘れた者が最も多く17%であり、4~5種類忘れた者が少なくいずれも4%であった。また、品名は長靴61%、防寒具、敷きマットがそれぞれ35%、雨カッパ7名(30%)、ペンライト6名(26%)、食器2名(9%)、帽子1名(4%)の順となっている。

## 2) 意識変化および心構えに関する結果

## (1) 「災害への意識の変化があった」について

表5で示すように、「事前学習は十分できた」との関係についてのみ意識の変化に対して有意であった(p < 0.05; Mann-WhitneyのU検定)。

また、表3に示すように、意識の変化有の平均値(標準偏差) 1.74 (0.885)における比較では、「事前学習ができた」(p < 0.0001)、「入浴できなかったが清潔は保たれた」(p < 0.005)、「準備は十分できた」(p < 0.005)、「睡眠・休息は充分とれた」(p < 0.05)であり、

表4-1 生活体験キャンプの準備状況 n = 48

忘れ物状況	人数	平均値	合計	
忘れ物がない	25名	52%	25名(52%)	
忘れ物がある	1種類	7名	15%	
	2種類	8名	17%	
	3種類	4名	8%	23名(48%)
	4種類	2名	4%	
	5種類	2名	4%	

人数 (%)

表4-2 忘れ物一覧 n = 48

忘れ物状況	人数	忘れた者の割合
長靴	14名	61%
防寒具	8名	35%
下敷きシート	8名	35%
雨カッパ	7名	30%
ペンライト	6名	26%
食器	2名	9%
帽子	1名	4%

人数・(%)

4項目において有意差を示した（t-検定）。

更に、表6で示すように、比率では「有」88%、「無」12%であった。「有」では「救急法は学習できた」・「高齢者の理解は深まった」で34%、「水は十分であった」

表5 目標到達度評価アンケート調査の分析結果

項目	意識の変化	心構え
準備	0.84	*0.043
入浴	0.45	0.721
睡眠・休息	0.902	0.824
食事	0.27	0.546
水	0.07	0.568
役割分担	0.14	0.275
連携	0.28	0.532
資源工夫	0.46	*0.033
事前学習	*0.048	**0.0001
救急法	0.244	0.09
高齢者体験	0.876	0.223

\* p < 0.05    \*\* p < 0.0001  
Mann-Whitney の U 検定

で32%、「役割は果たせた」で31%、「連携が取れた」で30%の順になった。そして、比率の比較をすると、「連携が取れた」と「救急法は学習できた」(p < 0.05)の2項目間において有意差を示した(カイ2乗検定)。

(2) 「心構えができた」について

表5で示すように、「事前学習は十分できた」(p < 0.0001)、「限られた資源の工夫はできた」および、「準備は十分できた」(p < 0.05)の3項目において有意差が見られた(Mann-Whitney の U 検定)。

表3に示すように、「有」と「無」の比較においては、心構え有り平均値(標準偏差)は2.23(1.065)であり、「高齢者の理解は深まった」(p < 0.001)、「救急法が学習できた」(p < 0.01)、「水は十分であった」(p < 0.05)の3項目間で有意差を示した(t-検定)。

また、相関係数を見てみると、「災害への意識は変化した」と「準備は十分できた」、および「心構えは出来た」と「睡眠・休息は充分とれた」との関係において、マイナスの相関係数を示した。

更に、表6で示すように、比率では「有」64%、「無」

表6 目標到達度評価アンケート調査の項目別分析結果

n = 42

項目	13) 意識変化の有無		カイ2乗検定	12) 心構えの有無		カイ2乗検定	
	有	無		有	無		
準備	有	24 (57%)	3 (7%)	0.8312	20 (47%)	7 (17%)	0.0756
	無	13 (31%)	2 (5%)		7 (17%)	8 (19%)	
事前学習	有	27 (64%)	2 (5%)	0.1344	25 (59%)	4 (10%)	***0.0001
	無	10 (24%)	3 (7%)		2 (5%)	11 (26%)	
入浴	有	22 (52%)	3 (7%)	0.9815	17 (40%)	8 (19%)	0.5423
	無	15 (36%)	2 (5%)		10 (24%)	7 (17%)	
休息	有	26 (62%)	4 (10%)	0.6512	20 (47%)	10 (24%)	0.6106
	無	11 (26%)	1 (2%)		7 (17%)	5 (12%)	
食事	有	26 (62%)	3 (7%)	0.641	20 (47%)	9 (21%)	0.3444
	無	11 (26%)	2 (5%)		7 (17%)	6 (14%)	
水	有	32 (76%)	3 (7%)	0.1358	22 (52%)	13 (31%)	0.6657
	無	5 (12%)	2 (5%)		5 (12%)	2 (5%)	
役割分担	有	31 (74%)	3 (7%)	0.2036	22 (52%)	12 (29%)	0.9067
	無	6 (14%)	2 (5%)		5 (12%)	3 (7%)	
連携	有	30 (71%)	2 (5%)	*0.0429	22 (52%)	10 (24%)	0.2801
	無	7 (17%)	3 (7%)		5 (12%)	5 (12%)	
資源工夫	有	27 (64%)	3 (7%)	0.5467	22 (52%)	8 (19%)	0.053
	無	10 (24%)	2 (5%)		5 (12%)	7 (17%)	
救急法	有	34 (81%)	3 (7%)	*0.038	24 (57%)	13 (31%)	0.8312
	無	3 (7%)	2 (5%)		3 (7%)	2 (5%)	
高齢体験	有	34 (81%)	4 (10%)	0.3951	25 (59%)	13 (31%)	0.5307
	無	3 (7%)	1 (2%)		2 (5%)	2 (5%)	

人数 (%) \* P < 0.05    \*\* P < 0.01    \*\*\* P < 0.001    カイ2乗検定



36%であった。「有」では「事前学習は充分できた」・「高齢者の理解が深まった」で25%、「救急法が学習できた」24%、「水は十分であった」・「役割は果たせた」・「連携は取れた」・「限られた資源の工夫はできた」では22%の順であった。そして、比率結果との比較では、「事前学習は充分できた」( $p < 0.0001$ )のみにおいて有意差を(カイ2乗検定)示した。

### 3) 目標到達度評価項目の意味付けの分類

13項目の評価内容を意味付けし、分類を試みた。

①キャンプに必要な主な物品の準備と事前学習については「準備満足度レベル」、②実際のキャンプ生活において体験する事柄については「適応満足度レベル」、③キャンプ生活において人間関係を基礎として成立する役割の遂行やグループ内の連携、工夫については「関係満足度レベル」、④高齢者疑似体験や施設見学や救急法などの演習による学習については「演習満足度レベル」、⑤全体の学習結果を自己評価する内容については「評価満足度レベル」と分類した。

平均値では、「演習満足度レベル」が1.9で最も高く、次に「適応満足度レベル」1.93・「評価満足度レベル」1.98・「関係性満足度レベル」2.07の順であり、「準備満足度レベル」2.32が最も低かった。

### 4. 生活体験キャンプにおける演習の結果

キャンプの初日に約3時間、救急法および車椅子移送、高齢者疑似体験キッドの説明および高齢者理解について、いずれも未履修内容であるためレクチャーと実技を含めた内容で実施した。また翌日は午前午後、高齢者疑似体験と高齢者施設「パース学園診療所・通所リハビリテーション施設」及び「グループホーム高山の家」の見学を実施した。ちょうど防災訓練を実施しており学生の参加体験が叶った。表7に示したように、学生が見学した日の施設利用者数および介護度の状況は、前者の通所リハビリテーション施設では要介

護2が最も多く6名(43%)、また後者のグループホームでは要介護3が最も多く8名(44%)であった。

アンケートの結果から、「救急法は学習できた」では平均値(標準偏差)が2.19(0.76)、「高齢者の理解は深まった」では平均値(標準偏差)が1.61(0.74)であった。いずれも平均値の比較において「心構えはできた」との間に有意差を示した(t-検定)。

## V. 考 察

本研究では、「災害時生活体験」科目における「生活体験キャンプ」が、どのように災害に対する意識変化や心構えに影響しているかを明らかにする目的で教育評価を実施した。これらの結果より、本学における「生活体験キャンプ」の実態と意義、災害への準備性や行動化への課題を導き、今後の災害に関する看護基礎教育へのあり方について考える。

### 1. 災害への意識の変化と心構えに対する課題

災害意識は、災害時におけるその行動や、平常時の災害準備にきわめて大きな影響を及ぼす<sup>9)</sup>、と言われている。また、看護系大学生を対象とした災害に対する意識の調査では、多くは災害看護に興味を持っているが自信のなさが伺える<sup>9)</sup>というものが多い。

本研究において、目標到達度評価の結果は、「災害に対する意識は変化した」が、「大いに変化有り」と「まあまあ変化有り」に100%の回答あり88%、「心構えはできた」が、「大いに変化有り」と「ふつう」の間に100%回答あり64%で、災害に対する意識の変化は高く、心構えに影響していることが分かった。このことから、災害時生活体験科目を選択している学生であることや前期の講義によって早期に意識付けがあったことが考えられる。

3日間のキャンプを通して、初日はどうしたらよい

表7 学生が見学した日における施設の利用者介護度状況

〈通所リハビリテーション施設〉			〈グループホーム・高山の家〉		
要支援	1名	(7%)	要支援	0名	
要介護 1	3名	(22%)	要介護 1	2名	(11%)
要介護 2	6名	(43%)	要介護 2	5名	(28%)
要介護 3	2名	(14%)	要介護 3	8名	(44%)
要介護 4	2名	(14%)	要介護 4	3名	(17%)
小計	14名	(100%)	小計	18名	(100%)
合計		32名			

人数 (%)

か分からずガラガラしていた事が、3日目には自ら探して手伝いを行い駆け足になっていることから、状況に対する判断が出来るようになり、思考による準備性が整っていったことが考えられ、明らかに意識の変化や行動の変容に至っていると考える。

「災害への意識は変化した」に影響を与えた体験は、「事前学習は充分できた」で目立って有意差があり、「入浴はできなかったが清潔は保たれた」、「準備は充分できた」、「睡眠・休息は充分とれた」、「グループでの連携がとれた」、「救急法は学習できた」と続いて有意差を示したことから、事前学習の重要性が示された。また、清潔への意識は、8月下旬から9月上旬のまだ暑い時期であったため清拭シートの利用により、実感を強める体験となったこと、忘れ物をした者が約半数あり、中でも防寒具や寝袋の下敷きにするマットの忘れ物が共に35%もあったこと、初日の雨天により睡眠や休息が不十分な体験をしている者が多いこと、更に、事前学習段階からのグループメンバー間での関係作りの難しさなどが影響したと考える。救急法については、必要性の認識に反し、恥ずかしさを伴う体験と感じた学生もいた。このように、不測の体験を通して心に深く印象付けられた出来事が認識され、災害への意識を高めたと考える。

「心構えが充分できた」に影響を与えた体験は、「事前学習が充分できた」、「限られた資源の工夫はできた」、「準備は十分できた」、「水は充分であった」、「救急法は学習できた」、「高齢者の理解は深まった」の6項目であったことから、準備や事前学習の不足に気付いた、また、食事時の食器洗いを少なくするためのサララップによる工夫、飲み水の制限、忘れた物を他の物で代用する工夫をしたなどの体験記録の表現に起因し、日ごとに参加態度が真剣になり、学習内容の充実に向けて参加意識が変容していった様子を反映している。

このように、必要に迫られることによって、不足の状況や遭遇したことを乗り切ろうとするアイデアの出し合いは、脳裏に深く刻まれ、心構えにつながる体験であったと考える。

「食事は充分であった」や「役割は果たせた」については有意差がなかったことから、非常食は思いのほかかまわずくないことや量より野菜不足などの質を気にした学生達も、状況においては仕方がないと判断したことが考えられる。また、役割はチーム活動が根底にあることから、日々意見交換を行い相互に補強しながら

進めたことが効果的であったと考える。

評価項目の内容に意味付けする試みは、生活体験キャンプ終了後の満足度概要が明らかになり、「準備満足度レベル」と「関係満足度レベル」が低く、「演習満足度レベル」、「適応満足度レベル」、「評価満足度レベル」がほぼ同レベルで高かった。経時的に適応満足度レベルを上げ、終了後に評価満足度レベルが上がったことから自信につながっていると考える。

意識の変化は、平常時の行動に影響し、行動を繰り返すことは自信につながる。意識とは、認識し思考する心の働き、感覚的知覚に対して純粋に内面的な精神活動を意味し、心構えとは、心にかけて待ち受けること、心の用心、覚悟などを意味する<sup>10)</sup>。このように、意識の変化は、心構えを育て、準備性と行動化を高めることを可能にすると考えられる。

今後の課題は、事前学習の内容を精選すること、更に意図的な災害意識の向上に向けたプログラムを思考することであると考える。

## 2. 災害時の高齢者理解に関する課題

1995年の阪神淡路大震災の時は、老人の死亡率が80歳代は年齢層人口の5～6倍、70歳代は年齢層人口の約3倍近くに及んだと言われている。また、高齢化率は、平成16年10月1日現在で19.5%であり<sup>11)</sup>、年々上昇傾向にある。

本研究において、演習項目の中で、高齢者への理解が深まった確率が最も高かったことから、事前学習を踏まえながら2日に渡って高齢者疑似体験と施設見学を行い、直接関わるという長時間の体験が影響していると考えられる。しかし、学生の約半数は高齢者と同居しており、約8割がボランティア等で高齢者と接していることから、今回の演習を通して学生達が体験したことは、それまでの高齢者への関わりで気付かなかった身体の重さ、目や耳や関節の不自由さとはどういうことか驚きをもって実感したこと、非常食が高齢者には辛いのではないかと関心を寄せたことなど、災害と高齢者の生活が具体的に結びついたと考えられる。

災害弱者といわれる概念がある。1) 子供、2) 女性、3) 老人、4) 貧困、病人、障害者、これらの人たちに被害が集中する<sup>12)</sup>。高齢者は災害弱者であり、災害時におけるケアは長期的に必要とされている。特に、高齢による聴力障害者の場合、使用できる通信手段が非常に限られ、避難行動に影響を与える<sup>13)</sup>ことや、高齢者は、主に膝や足など下半身の痛みで悩まされ、そのことが自宅での生活や買い物・外出などの活動の制

限につながり支障をきたしていること<sup>14)</sup>、援助方法として、乾パンなど硬い食事への配慮、ポータブルトイレの準備、薬剤の投与で1錠を半錠に割ることも出来ない内服に関する細やかな心遣い、避難所で訴えなく、うつ状態になっている1人暮らしの高齢者への配慮<sup>15)</sup>、劣悪な生活環境から感冒を悪化させ、慢性病の存在が精神身体症状の大きなりスクファクターとなり慢性病の悪化につながる<sup>16)</sup>など、厳しい現状が存在している。

今後の課題は、健康障害の学習を、専門科目の学習進度と合わせて「高齢者災害看護」として、高齢者への細々とした日常生活についての理解を深めるために、教授する必要があると考える。

### 3. 「生活体験キャンプ」の意義

災害は予測なしに起こる。

本学で実施された「災害時生活体験」科目における「生活体験キャンプ」は、2泊3日のテント生活の体験である。「生活体験キャンプ」の実施は多くの準備努力と体力を要するが、その背景には、看護者として人々の日常生活を健康の側面から支えることの重要性や教育活動への認識がこれを支えていると考える。

本研究では、学生は、事前学習や準備として何が必要かを理解できたこと、限られた状況の中では工夫をしながら適応する努力が必要であること、共に生きる仲間との連携には時間感覚とディスカッションと協力が大切であること、そして、屋内外の環境やテント内のゴミ管理など、生活の基本となる事柄について多岐に渡り実感することができたことから、体験することの意義を理解したと考える。更に、体調を崩して診察を受けた学生をサポートする仲間やギブアップしなかった本人は、診察した医療者の対応や体験を通して、環境は、身体的・精神的にも健康保持に影響することや救急医療の必要性について学んでいる。

これらのことは、災害時看護の役割に対する学習となり、先行研究における災害時看護の役割に対比させると、被災状況の把握や安全の確保・保持、救護／救援システムの構築と運用については事前学習の範囲に留まったが、健康レベルの維持・回復、被災者の生活の建て直しについては、健康レベルの維持・回復は、季節による影響や不慣れな環境での生活に対する対策として重要であること、また、被災者の生活の建て直しは、生活へのニーズを把握し、生活の視点からアセスメントすること、生活ニーズへのアクションが必要である<sup>17)</sup>など、その一端を体験することが出来た。中

でも雨天の体験は、困惑と判断、工夫と応用を迫られた貴重な体験になっている。

キャンプファイヤーのスタンプは、V.ヘンダーソンが基本的看護の13項目にあげる基本的構成要素の「遊び、あるいは種々のレクリエーションに参加すること」<sup>18)</sup>に相当し、人間の日常生活には、人々の和や気分転換が精神的支えの一つとして有効であることが理解できたと考える。

つまり、「生活体験キャンプ」には、ライフラインが絶たれた状況における生活を体験するのに必要な環境条件と日常生活を送るための判断力や応用力を学ぶのに有効な学習素材がある。そして、災害時看護の役割の一端を理解する体験が出来ると考える。

### 4. 災害への準備性と行動化に対する課題

災害への不安が高いにも関わらず防災対策が不十分である<sup>19)</sup>、という看護系大学生の調査報告がある。

本研究において、「生活体験キャンプ」への参加準備状況は、防災対策の不足を予感させるものがあつた。それは、目標到達度評価アンケート結果の「準備は充分できた」に対する5段階評価において、物品の準備不足が約半数おり、5種類忘れた者も、1種類忘れた者も、満足度が2「まあまあ有り」から5「全くない」に分散している。このことから、忘れ物の種類によって必要性が異なることや、種類の数による価値幅のばらつきによって評価判断の揺れが起こったのではないかなどが考えられ、準備性の難しさを再認識することになった。しかし、「次に何かあつたときに何が必要か分かつた」という記録から、体験によって自ら不足物とその必要性に気付いていることが分かる。準備する段階において、物品の必要性が根拠をもって認識できるようになることが体験の意味であるとする、体験学習による認識の深まりによって準備性の行動化は可能になると言えると考えられる。

先行研究において、災害への対策が不十分である理由は、「そのうちしようと思った」「忙しかった」と回答したものが25%あつた<sup>20)</sup>。災害は、天災や運命だとする災害観が防災対策の障害になっている<sup>21)</sup>とする報告もあり、原因は多様である。また、災害に対するリスク認知は高いものの、「災害への備え」は全く行っていないことからリスク認知と「災害への備え」との関係は直接的なものではない<sup>22)</sup>、被災体験を有していても必ずしも災害に対する準備性を高めることにはなっていない<sup>23)</sup>などのことから、準備性の理解と実際の準備行動には差があり、準備時間と準備時の質に関わる

ことが原因ではないかと考える。

今後の課題としては、必要物品の根拠や準備の大切さを事前に問題視すること、他に、家族や大切な人との連絡方法や危険な箇所の確認、避難する為の準備などについても学習を深める必要がある。そして、今後の追跡調査が必要であると考えられる。

### 5. 災害看護基礎教育への課題

災害時看護とは、刻々と変化する状況の中で被災者に必要とされる医療および看護の専門知識を提供することであり、その能力を最大限に生かして被災地域・被災者のために働くことである<sup>24)</sup>。また、災害看護学にとって、どのように知識を体系づけられ、理論が構築されたとしても、その目的は実践にある<sup>25)</sup>。

本学における災害時生活体験科目の教育方法は、講義と体験学習の2本立てになっている。本研究は、その一部の教育評価であった。災害看護の現場を実習することは不可能であるが、災害に対する看護基礎教育においても専門科目のカリキュラムと同様、知識・技術・態度の統合が必要である。そして、災害看護の現場に出向く場合、準備すべき幾つかの要素があるとすれば、この体験学習は、重要な学習の導入段階に当たると考える。

また、今回の学生達の反応から、災害に対する意識の変化や心構え作りに影響を与え、行動化に至る準備性の学習には、何を、どのように準備すればよいか、自ら気付いてゆける、多様な体験による学習の有効性が高いと言える。

今後の課題は、学習内容と方法の明確化、個別性への対応、多様な状況設定による段階的な学習プログラムの作成、組織的、統合的なカリキュラムの構築などが必要であると考えられる。

最後に、豊かな人間性、高度な専門知識・技術、広く社会に貢献できる人材の養成は、多様な学習方法と関わりの質を通して可能にするものと考えられる。

この研究の限界として、調査対象が本学の1年次学生に限られていることがあげられる。今後はサンプルを蓄積していく必要があると考えられる。またこの災害時生活体験学習は、今回が初回であることから、完全にライフラインが絶たれた状況を設定し得なかったことである。

## VI. おわりに

看護系大学における災害に関する看護基礎教育の体

系化が望まれている。

本研究では、本学の災害時生活体験科目における「生活体験キャンプ」の教育評価を検討した結果、1. 災害に対する意識の変化や心構えは、事前学習や不測の体験によって深く認識されること、2. 災害時の高齢者支援には、高齢者に対する身体的能力や日常生活に関する具体的な理解の仕方が必要であること、3. 準備性や行動化は、体験や意見交換による意識の深まりと準備時間や準備の質によって、高まる可能性があること、4. 体験学習には多くの災害学習素材があることなどが明らかになった。

今後の課題は、更に学習プログラム内容を精選すること、他科目との関連性を視野に入れたカリキュラム内容の体系化を進めること、継続的な取り組みによる調査が必要であることなどが示唆された。

## VII. 謝 辞

今回の報告に際し、パース学園診療所・通所リハビリテーション施設、ケアハウス高山の家の職員の方々、またアンケートに回答してくれた学生、論文をまとめるに当たり快くご指導くださいました矢島正栄教授、本学助手の小林和成先生はじめ、ご協力下さいました皆様に深く感謝の意を表します。

## VIII. 文 献

- 1) 三澤寿美、青木実枝ら：A県の看護職員に対する災害看護への役割意識の向上を目指した取り組み、日本災害看護学会誌 7(1)：2005：p54.
- 2) 山本あい子、岸田佐智：日本災害看護学会誌の5年間の総括と今後の展望：日本災害看護学会誌 5(3)：2003：p23-28.
- 3) 災害看護の発達段階と論文、日本災害看護学会誌 5(2)：2003：p1.
- 4) 山本あい子：災害に対する備えの行動化—災害看護からの提言、日本災害看護学会誌 7(1)：2005：p29.
- 5) 山田 覚：災害多発県における災害時看護指針の作成と看護支援ネットワークに関する研究、研究報告書、平成12年度・13年度科学研究費補助金(基盤研究B(2)1247053)：西富膳写堂：p23-24.
- 6) 高木タカ子：共育キャンプ高木学校一保助看学生のための体験学習実践記録：ミリオン書房：1984.

- 3.
- 7) 黒田裕子監：やさしく学ぶ看護理論。改訂版：2004：p86.
- 8) 廣井 脩：新版 災害と日本人—巨大地震の社会心理—。1995：p24-55.
- 9) 山本あい子、岸田佐智：日本災害看護学会誌の5年間の総括と今後の展望：日本災害看護学会誌：2003：(5) 3：p23-28.
- 10) 広辞苑第五版：岩波書店：Canon. Intelligent Dictionary. IDF-2100.
- 11) 平成17年度版 高齢社会白書：2005：p2.
- 12) 二宮宣文：山本保博、三浦規監修；国際災害看護マニュアル、災害医療総論、真興交易医書出版部。2002：p31.
- 13) 張 暁春、渡辺智恵：事例における聴力障害者の情報ニーズの明確化—阪神・淡路大震災と豊岡水害の経験から—。日本災害看護学会誌 7 (1)：2005：p92.
- 14) 松岡千代、水谷信子ら：災害復興住宅居住高齢者の長期的ケアニーズの抽出と支援に関する研究。日本災害看護学会誌 7 (1)：2005：p97.
- 15) 酒井明子：東海集中豪雨長期調査。日本災害看護学会誌 5 (3)：2003：p28.
- 16) 森 菊子、鶴飼和浩ら：災害時における慢性病患者の健康ニーズ：日本災害看護学会誌 7 (2)：2005：p95.
- 17) 山田 寛：災害多発県における災害時看護指針の作成と看護支援ネットワークに関する研究。研究報告書。平成12年度・13年度科学研究費補助金（基盤研究B(2)1247053）：西富膳写堂：p23-24.
- 18) 黒田裕子監：やさしく学ぶ看護理論。改訂版：2004：p92.
- 19) 山本あい子、岸田佐智：日本災害看護学会誌の5年間の総括と今後の展望：日本災害看護学会誌 5 (3)：2003：p28.
- 20) 奥野信行、増野園恵ら：災害時の備えに関する教育プログラムの実施と評価—地域住民を対象とした講習会の実施を通して。日本災害看護学会誌 7 (1)：2005：p104.
- 21) 勝間みどり、伊藤明美ら：看護基礎教育における災害看護に関する研究その3 —学生の災害看護に対する認識と地震体験の実態—。神戸市看護大学短期大学部紀要 (17)：1998：p17-25.
- 22~23) 山本あい子、岸田佐智：日本災害看護学会誌の5年間の総括と今後の展望：日本災害看護学会誌：2003：(5) 3：p23-28.
- 24) 山崎達枝：災害看護の基本と看護婦の役割：国際災害看護マニュアル、災害医療総論、真興交易医書出版部。2002：p75.
- 25) 池川清子：災害看護の研究と「現場性」。日本災害看護学会誌 5 (3)：2003：p1.

### Abstract

This college conducted an “experience-based disaster training camp” as an experiential disaster training course in its Faculty of Health Science. An educational assessment was made to clarify the effects of this experiential training on students’ thinking about disaster. A questionnaire survey of the students’ goal achievement levels and students’ reports of their experiences in the camp were analyzed, with the following results :

Of the respondents, 88% replied that their thinking about disaster had changed as a result of the “experience-based disaster training camp.” The specific experiences which influenced this result were advance study, level of preparation, cleanliness in a bathless environment, intra-group communication, effective use of resources, restrictions on the use of water, and study through practical exercises.

The results clarified the fact that changes in thinking about disaster are recognized and can be fostered, depending on the level of advance preparation and unexpected experiences which leave a deep mental impression on the subjects. The results also revealed that, as an educational method for training in disaster nursing, the “experience-based disaster training camp” is an effective teaching tool which allows students to gain a practical understanding of minimum environmental requirements and acquire the essential judgment/application capabilities necessary in daily life, and thus provided numerous useful suggestions for education in this area.

**Key words :** Experience-based disaster training camp, change in students’ attitudes toward disaster, preparation level for disaster training camp, the elderly, disaster nursing education